

iPS網膜臨床 募集開始

理研チーム 患者に光



記者会見に臨む理化学研究所の高橋政代プロジェクトリーダー（中央）ら＝6日午後、神戸市中央区（恵守乾撮影）

「患者さんに救いを」「実用化へ向けた大きな一歩」。他人の人工多能性幹細胞（iPS細胞）による網膜再生医療の臨床研究に携わる理化学研究所の高橋政代プロジェクトリーダー（55）らは6日、神戸市内の会見で思いを語った。

高橋リーダーは会見で、「将来的な治療がどうなっていくのかを決めるための重要なステップだ」と強調した。同席した大阪大の西田幸二教授（54）は、治療を受けながら完治に至らない患者が多い現状を挙げ、「新（臨床研究によって）新

しい医療に道が開かれ、患者さんらの救いになれば」と続けた。

臨床研究の対象となる目の病気「加齢黄斑変性」の患者は国内に70万人近くいるとされる。患者らでつくる「関西黄斑変性友の会」（大阪市）の星野龍一事務局長は「（この臨床研究で）状況がかなり前に進む」と評価する。

また、臨床研究では、京都大がストックしている拒絶反応が少ないiPS細胞を利用する。この手法は、心臓の再生医療を研究する大阪大の澤芳樹教授やパーキンソン病の治療に取り組む京都大の高橋淳教授らも採用を予定しており、今回の臨床研究は後に続く事例の試金石にもなる。

拒絶反応が少ない細胞の型を持った健常者からiPS細胞を作製



京都大
iPS細胞をストック
（写真は京都大iPS細胞研究所提供）



大阪大病院など



患者に移植
網膜色素上皮細胞に分化させる
理化学研究所

パーキンソン病の治療に關しては、京都大は平成30年度の治験開始を目指すとしており、「全国パーキンソン病友の会」の藍澤正道事務局長は「ストックの活用によって治療にかかるコストや時間といった従来の障壁を乗り越えられるのではないか。明るい希望が持てる」と期待をにじませた。

他人のiPSで網膜再生

臨床患者の募集開始

理研チーム

患者本人ではない他人から作製した人工多能性幹細胞（iPS細胞）で目の病

気を治療する再生医療について、理化学研究所などのチームは6日、対象となる患者の募集を始めたことを明らかにした。また、同日

から臨床研究を開始したと発表された。対象となるのは、目の病「加齢黄斑変性」と診断

され、一般的な治療を受けても効果がなく50〜85歳の患者。希望者は、かかりつけの眼科で治療の経過などを紹介状にまとめ、神戸市立医療センター中央市民病院へ郵送する。対象になる可能性があれば、移植に使うiPS細胞と患者の免疫の型が合致するかなどの検査を同病院で行い、可否を

決める。過去3年以内にかんと診断された患者などは、対象外。募集の詳細は、中央市民病院のホームページで公開している。臨床研究では、京都在がストックしている拒絶反応を起しにくいタイプの特殊なiPS細胞を利用。理化学研究所の高橋政代プロ

ジェクトリダーらが網膜の色素上皮細胞に分化させ、今年以降、中央市民病院と大阪大付属病院で5人前後の患者へ色素上皮細胞を含んだ液体を移植する。臨床研究の主な目的は安全性の確認だが、特に今回は他人の細胞を移植するため、拒絶反応を抑えられるかの検証が焦点となる。

「重要なステップ」

京都大iPS細胞研究所長を務める山中伸弥教授の話「提供する再生医療用iPS細胞をストックを使うことで時間と費用を大幅に削減できるため、iPS細胞を使った再生医療が普及するためには必要かつ重要なステップだ」

朝産経朝
から通
8月分
10万円の
李玉は
も成人式
出席して
流のある